

# 経済情勢

## 概観

### 海外

#### ◇順調に進む欧州共同市場

本年1月1日から域内関税の引下げ、輸入割当量の拡大に踏み出した欧州共同市場は、発足後わずか数か月を出でずしてすでに域内の企業合同ないし提携、米国企業の域内進出がかなり積極的に行なわれており、これと平行して長短資本の交流は活況を呈し、域内貿易も漸増傾向を示している。この間フランス経済の顕著な立ち直りとベルリン問題を背景として独仏関係は一段と緊密化し、両国を枢軸として欧州共同市場の政治的、経済的基礎は漸次強固なものとなりつつある。これに伴い欧州諸国民の欧州共同市場に対する自信と積極的関心が急速に高まりつつあることは注目を要する。

6か国を経済的に統合して第2の米国すなわち United States of Europe をつくるという難事業が、上記のごとき順調な滑り出しを示したことは、種々の要因が複雑にからみ合っているが、その大綱を要約すれば次の三つの要因に帰着するものと思われる。

- (1) 昨年末に行なわれた欧州各国通貨の交換性回復とそれに続く一連の為替自由化措置によつて、ローマ条約では1961年までに実施予定であった域内資本取引の自由化が最近までに事実上ほぼ達成されたこと。
- (2) 米国国際収支の大幅の逆調と西ドイツの資本輸出政策により、従来金・ドルの偏在していた米独両国より巨額の金・ドル流出が行なわれ、西欧諸国間の金・ドル準備の不均衡が是正され、各国通貨の安定がもたらされたこと。
- (3) 米国景気の着実な上昇を軸として世界景気

好転の見通しが明らかとなつてきたこと。米国経済が3～4月一段と上昇テンポを早めているのに対し、西欧諸国の景気段階にはなおかなりの相違があるが、西ドイツをはじめイタリア、オランダなどはすでに拡大過程にあり、比較的回復の遅れている英仏両国も金・ドル準備の充実を背景に着々金融、財政面よりの景気刺激策を打ち出しつつあり、これらを背景に世界貿易もすでに昨年第4四半期以降拡大に転じつつある。

いうまでもなく欧州共同市場の前途には対内的、対外的に調整を要する幾多の問題が横たわり、なおかなりの迂余曲折が予想されるが、前記のごとく欧州共同市場の発足が、世界経済の上昇期に際会したことはまことに好運であつたというべく、今後拡大せる市場を背景として国際分業の推進、大量生産方式の採用などにより西欧経済は漸次新しい発展段階に入るものと思われ、今後の動向が注目される。

### 国内

#### ◇景況は落ち着いた拡大へ

最近の商品市況は一段と落ち着きを示している。すなわち、鉄鋼、非鉄のストによる値上りはその後急速に訂正されたほか、繊維も小幅もみ合い商状を続けており、こうした主要商品の動きを中心に市況は全般に平静の色を濃くしている。本行卸売物価指数も、こうした商品市況の動きを映じて4月中旬以降横ばいに推移し、5月上旬には0.1%低落と昨秋以来はじめての値下りをみせた。もちろんこうした物価の動きについては、不需要期入りという季節的要素を考慮に入れなければならな

いが、在庫投資需要の増勢一服、順調な生産拡大などによつて需給の均衡がとれてきたということがその主因と思われる。かかる事情を背景として、ひところの思惑的な市場人気の動きが著しく影をひそめつつあるということも見のがしえない最近の傾向の一つであろう。

3月の鉱工業生産は季節調整後の指数では前月を下回つたが、これについては鉄、非鉄、石炭などのストの影響がかなり大きく、スト品目を除いてみるとほぼ前月比横ばいとなつている。一方出荷も依然高水準を続けており、ストの影響を考慮するとこれまた前月とほぼ横ばい程度の実勢であつたとみられる。他方こうした高水準の出荷に支えられて、製造業者の製品在庫は資本財、耐久消費財を中心に引続き減少傾向を示している。

経済活動の基調はひところの顕著な上昇からこのところより落ち着いた動きへと転じつつあるが、それは、これまで急速な回復を支えてきた在庫投資の増勢が鈍化したためとみられる。しかしながら、生産者の原材料在庫蓄積は引続き行なわれており、販売業者在庫も低い水準にあるから、在庫投資は従来ほどのテンポでないにしてもなお増加を続けるであろう。一方消費、輸出などの最終需要をみると、これも底堅い増勢をたどつているから、当面経済の上伸力はやや弱まるにしても、生産活動は今後とも強調気味に推移するものとみられる。

この間、3月決算にもうかがわれるように、企業収益は著しく好転しており、これに伴い企業の自己金融力もかなり増大してきている。こうした事情が、銀行の貸出態度の緩和とあいまつて、企業の強気な投資態度を刺激していく可能性も少なくない。新規の設備投資計画の具体化はまださほど目立つてはいないが、その成行きには引続き注目を要するものがある。

一方国際収支は引続き順調な黒字基調を続けている。輸出面では繊維、鉄鋼、船舶のような主力

品目の輸出が振わないなど問題点もあるが、総じていえば、国内経済の拡大もこれまでのところ国際収支面への圧迫要因とはなつていない。

#### ◆注目される銀行の貸出態度

4月の金融市場は、財政資金の季節的散超を主因にかなり引き緩み、コール・レート（単純無条件物中心）も久方ぶりに申合せ限度（2銭4厘）を下回つた。もつとも2銭2厘台となつたのはわずか数日にとどまり、レートは予想されたほど低下しなかつたが、本行貸出の返済資金を中心とする資金需要が強い現状ではこうした傾向もある程度自然の成行きであろう。

個人所得や消費の拡大、さらには小口現金取引需要の増大などを映じて、銀行券の発行基調は引続き強いが、5月に入つてからは若干落ち着きを取り戻している。

この間、4月の全国銀行貸出は前年同月の増加と異なり182億円とかなりの減少をみせた。3月末の粉飾の反動という点は考慮しなければならないが、やはりその基本は、経済活動の拡大に伴う資金需要のかなりの部分が企業の自己金融力の増大ないしは流動性の圧縮などによつてまかなわれ、銀行に対する借入需要をそれほど増大させるまでには至つていないためと考えられる。これと関連して注目を要するのは、3、4月と預金通貨の伸びが停滞していることである。

以上のように経済金融の動きはこのところかなり落ち着きを示している。しかしながら経済上昇の基調は、そのテンポがやや鈍つたとはいつても依然根強いものがある。不需要期入りにもかかわらず物価が横ばい程度で推移している点もその一つの証左であろう。結局今後の成行きは企業の投資態度と金融情勢のいかんによつて決定されようが、急速な市中貸出金利の低下にみられるような銀行の貸出態度の積極化傾向は当面最も注視すべき要因であろう。